

## 市内の登録候補建造物の概要（※下線は用語解説あり）

雲松寺(うんしょうじ) 計4件(棟)／姫路市河間町19他

### (1) 登録候補建造物の名称

①本堂、②玄関及び庫裏(くり)、③山王(さんのう)堂、④山門(さんもん)及び袖塀

### (2) 登録の概要

雲松寺は、姫路城北側の野里門跡北方に所在する黄檗(おうばく)宗寺院で、鶴棲(かくせい)山と号する。

もとは威徳寺町に存在した天台宗の曼陀羅(まんだら)寺(増位山随願寺の末寺)であったとされるが、慶長年間の池田輝政による姫路城下町整備の際に、臨済宗妙心寺派に改宗、山号を鶴棲山、寺号を雲松寺と改名し、現在地に移されたと伝わる。改名は、昭和初期まで存在した大きな松の木に因んだとされ、雲の如く枝を伸ばしたその松は「鶴居の松」として有名であったという。承応元年(1652)の火災で境内(けいだい)建物は焼失したが、明暦3年(1657)に再興され、寛文6年(1666)には臨済宗黄檗派に転じ、黄檗山万福寺(京都府宇治市)の末寺となった。

播磨における黄檗宗布教の中心的役割を果たしてきた寺院。

#### ①本堂：宝暦元年(1751)建立、江戸後期・大正14年(1925)改修

境内中央の切石積み基壇上に南面して建つ。桁行七間、梁間七間、入母屋造り本瓦葺きで、四周に裳階を付し、大棟に宝珠(ほうじゅ)を飾る。播磨地方の黄檗宗寺院の代表的な建築のひとつで、「造形の規範となっているもの」として評価された。

**細部解説：**身舎組物は平三斗で軒扇垂木、妻飾りは二重虹梁墓股。内部は前後二列に六室を配した六間取りの平面で、畳を敷いて格天井を張り、西面には位牌壇が張り出す。後列中央間に須弥壇を配し、後列西間には仏壇、東間には床の間を設けている。大工は幸野文左衛門武久。



外観 南面



内部 後列中央間

#### ②玄関及び庫裏：昭和5年(1930)頃建立

本堂の東に南面して建つ。入母屋造り 棧瓦葺きで、玄関は正面に唐破風屋根の式台を付し、庫裏は北・西庭を望む座敷の室境に雁(がん)、松、竹、梅の襖絵をたてる。瀟洒(しょうしゃ)なつくりで、「造形の規範となっているもの」として評価された。

**細部解説：**東西棟の玄関棟の東に南北棟の庫裏が接続し、全体に逆L字形の平面を構成する。庫裏は南西を土間(どま)、北に二列六室を配し、北端の二室を床の間を備えた座敷とする。「鶴棲山」の山号になぞらえるように、玄関正面の彫刻や襖の引手には鶴の意匠が用いられている。



外観 南面



内部 梅の間

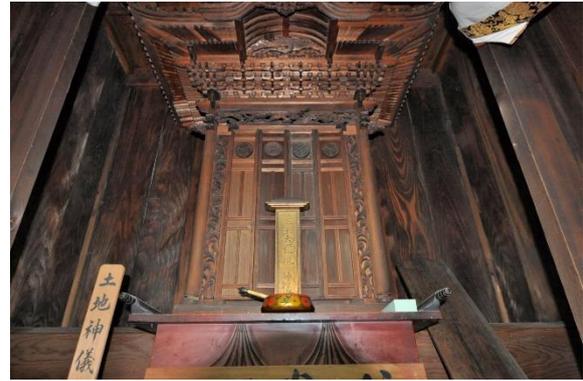
③山王堂：昭和6年(1931)建立

境内東側の山門北西に南面して建つ、山王権現(ごんげん)を祀(まつ)る小堂。桁行三間、梁間三間半、入母屋造り本瓦葺きで、正面に一間の向拝を付す。正面にガラス戸を建てた近代らしい仏堂で、「国土の歴史的景観に寄与するもの」として評価された。

細部解説：組物は舟肘木、軒は一軒疎垂木、妻飾りは虹梁大瓶束とする。内部は内陣及び外陣とし、内陣背面中央の仏壇上に宮殿(くうでん)を配す。



外観 南面



内部 内陣 宮殿

④山門及び袖塀：江戸中期建立、大正4年(1915)移築

境内東辺の入口に東面して建つ、一間一戸、入母屋造り本瓦葺きで、上層に梵鐘(ぼんしょう)を吊り下げた鐘楼(しょうろう)門形式の山門と南北に続く土塀で、山門下層は、四隅に角柱と円柱を一对で立てた特異な形式とする。凝ったつくりの山門で、境内の表構えを整えており、「国土の歴史的景観に寄与するもの」として評価された。

細部解説：上層は円柱を立て、組物は尾垂木付き二手先、軒は二軒繁垂木とし、腰組付き縁に高欄を付す。大正4年の道路拡幅に伴い、境内南東から現在地に移築し、袖塀を増築した。



外観 東面

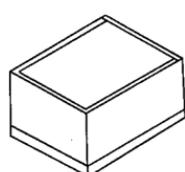


見上げ

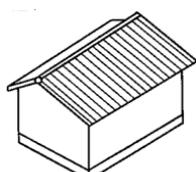
<参考>

※用語解説(■ 今回関連の用語)	
■基壇(きだん)	土や石などを用いて周囲より一段高く積み上げた基礎部分。
切妻(きりづま)造り	切妻屋根(棟を頂点としてふたつの傾斜面が合わさった山形の屋根)とした建物の形式。傾斜の付いた屋根側を平側、その端側を妻側という。
寄棟(よせむね)造り	切妻屋根の妻側にも傾斜をつけた屋根とした建物の形式。
■入母屋(いりもや)造り	切妻と寄棟を結合したような屋根とした建物の形式。
宝形(ほうぎょう)造り	頂点を中心に、四方に傾斜を付けた屋根とした建物の形式。
■本瓦葺(ほんがわらぶ)き	丸瓦と平瓦を交互に組み合わせさせた屋根の葺き方。
■棧瓦葺(さんがわらぶ)き	丸瓦と平瓦を一つにした「棧瓦」を使用した屋根の葺き方。
平入(ひらいり)	建物の平側(基本的に長手側)を出入口とした形式。
妻入(つまいり)	建物の妻側(基本的に短手側)を出入口とした形式。
■唐破風(からはふ)屋根	中央は凸曲線、両端は凹曲線を描いた形の屋根。
■身舎(もや)	建物の本体部分で、庇や下屋などに対する主たる部分をいう。
■裳階(もこし)	仏堂や塔などの身舎屋根下に、屋根を指し掛けて張り出した下屋状の部分。
■向拝(ごはい)	仏堂や社殿の主に正面に付された、柱をたてて屋根を張出した部分。
礎石(そせき)	柱を据える基礎となる石。
■組物(くみもの)	主に柱上に配される、方形の斗(枅、ます)と肘木で構成される木組。
■腰組(こしぐみ)	斗拱(ときょう)、枅組(ますぐみ)ともいう。縁下の組物を腰組という。
■平三斗(ひらみつど)	大型の斗(大斗)、肘木、三連の斗(巻斗)を重ねた組物の形式。
出組(でぐみ)	平三斗を、前方に突き出した肘木にも載せた組物の形式。前方に二段突き出したものを二手先、三段突き出したものを三手先という。
■二手先(ふたてさき)	
■三手先(みてさき)	
支輪(しりん)	軒と壁の境に設けられた格子状の部分。
■一軒(ひとのき)	軒裏の形式で、屋根を支える垂木が1段のものを一軒といい、地垂木、飛檐(ひえん)垂木の2段用いたものを二軒という。
■二軒(ふたのき)	
■扇垂木(おうぎだるき)	屋根を支える垂木という細い材を、放射状に配した形式。
■繁垂木(しげだるき)	垂木同士の間隔を、垂木の幅と同程度とした形式。
■疎垂木(まばらだるき)	垂木同士の間隔を広く配した形式。
■尾垂木(おだるき)	組物に組み込まれ、斜め下方に突出した太めの材。
出桁(だしげた)造り	柱から突き出した腕木に桁(出桁)を渡し、垂木をかけた軒の形式。民家や簡易な門などで多く用いられる。
■虹梁(こうりょう)	柱間にかける横木(梁など)で、両端がやや湾曲したもの。
■臺股(かえるまた)	二つの横木の間で設け、上の斗を載せた末広りの材。彫刻が付されるようになり、単に化粧材として用いられることもある。
■大瓶束(たいへいづか)	二つの横木の間で設ける、短い柱(束)の一種。横断面は円形で下方は徐々に細くなる。上部に斗を載せ、下端に結綿(ゆいわた)と呼ぶ飾りが付き、左右に笈形(おいがた)と呼ぶ飾りが付く場合がある。
■格(ごう)天井	角材(格縁)を縦横に交差し、その上に板を張った形式の天井。
棹縁(さおぶち)天井	細い材(棹縁)を平行に並べ、その上に板を張った形式の天井。
■須弥壇(しゅみだん)	本尊などを安置するため、一段高く設えた場所。

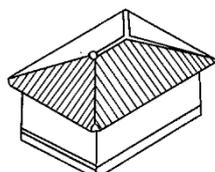
屋根の形式 — 建築用語図解辞典より —



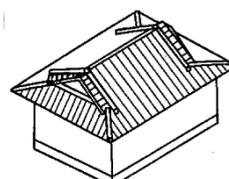
陸屋根



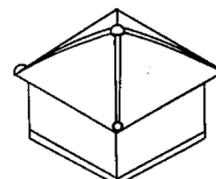
切妻屋根



寄棟屋根



■入母屋屋根



宝形屋根